

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12521

研究課題名（和文）『吳忠信日記』解読による対日戦争期中国民族問題の分析

研究課題名（英文）Research on Chinese ethnic problems during anti-Japanese war period based on analysis of Wu Zhongxin's diary

研究代表者

上野 稔弘（Ueno, Toshihiro）

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：10333907

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では1930・40年代中国の边疆民族政策で中心的役割を果たした吳忠信の边疆民族問題に対する取り組みを分析すべく、近年全面公開された彼の日記の解読を進めた。史料収集の上でコロナ禍の影響は少なくなかったが、日記の活字版が刊行されたことで問題をある程度克服することができた。日記の解読と並行して『蒋介石日記』や中華民国期の行政文書等の関連資料との比較検証を行い、既存資料からは断片的にしか把握できなかった対日戦争期中国の边疆民族政策について、吳忠信の立場に基づく問題意識と状況認識を通じて系統的に把握することが可能となり、近現代中国の民族問題について新たな研究視角を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では吳忠信日記の解読を通じて、その資料的価値が極めて高いことを確認した。特に边疆民族問題に関しては重要な情報が備忘録的に収録されており、既知の史料の補完や背景理解を大いに促進するものであった。他方で日記は边疆政策部門の強化を目指した吳忠信が、対日戦争中のチベットや新疆での独立運動激化に直面し、外交・軍事と不可分な边疆民族問題の現状に幾度も挫折感を味わい苦悩する様子を克明に記している。こうした当時の状況を理解することは、現在の中国共産党による民族政策が国外からの影響力排除と強力な軍事・警察力を背景として実施されている歴史的背景を理解するという面からも意義を持つものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to analyze the efforts of Wu Zhongxin, an important person in China's frontier ethnic policy in the 1930s and 1940s, with regard to frontier ethnic issues. For this purpose, I deciphered his diary, which has recently been fully disclosed to the public. The work was affected by COVID-19, but the publication of the diary helped overcome the problem. In parallel with deciphering the Wu's Diary, I compared and verified it with related materials such as the Chiang Kai-shek Diary and administrative documents of the Republic of China. As a result of this work, it became possible to systematically understand China's frontier ethnic policies during the Anti-Japanese War, which had previously been understood only in fragments, through Wu's awareness of ethnic issues and his perception of the situation in China's frontier regions. This has allowed us to present a new research perspective on ethnic issues in modern and contemporary China.

研究分野：中国近現代史

キーワード：中国近現代史 民族問題 吳忠信 蒙藏委員会 中国 民族政策 边疆地域

1. 研究開始当初の背景

民族問題は近現代中国の国家統合と不可分の課題として、重要な研究テーマとなってきたが、同時に民族問題は今日にいたるも中国の政治的安定に関わる敏感な問題であり、中国においては民族問題に関連する史料の閲覧には依然制約が多く、そのことが中国の民族問題に関する研究の進展を左右してきた。特に対日戦争期の国民党政権下の民族政策については、中国共産党の民族政策と対照的に扱う中国当局の姿勢が、史料の刊行傾向にも反映されていた。台湾や欧米における対日戦争期中国の公文書史料公開の進展はこうした状況を徐々に改善するものであるが、边疆民族問題に関する公文書は蒋介石文書や国民政府文書、外交部文書などに分散した形になっており、边疆民族事務を担当した蒙藏委員会所蔵の文書が依然未公開ということもあり、対日戦争期中国の民族問題を研究する上では全体的系統性の面で依然不十分であった。こうした中で民国期边疆行政の重要人物である吳忠信の日記が公開されたことは、こうした既公開史料の全体性や系統性の欠如を補い、特に対日戦争期の中国边疆地域に対する民国政府の対応を俯瞰的に把握できるようになることを期待させるものであった。

2. 研究の目的

本研究は近年台湾で全面公開された吳忠信の日記の解読を通じて、吳忠信が中心となって展開した対日戦争期中国の边疆民族政策の展開を通時的に俯瞰することを目的とする。吳忠信は1936年から1944年の約8年間蒙藏委員会の委員長にあり、また1944年から1946年にかけて新疆省長を務めるなど、長期にわたって中国の边疆行政に携わり、民族政策を担ってきた人物である。吳忠信がチベットのラサを訪問した後に中央政府に提出した『入藏日記』や新疆省長時代の記録である『主新日記』を通じて、吳忠信がかなり克明に日記を記していたことは知られていた。日記の解読を通じて目指したことは、第一に日記の資料的価値を確認することである。例えばこれまでに公開されている边疆民族問題に関する公文書との関連では文書が作成された背景や経緯を理解する上で有用な情報の有無などが挙げられる。第二に吳忠信の边疆民族政策に対する考え方およびその時間的変遷の把握である。吳忠信は国民党政権の全權大使としてラサに赴きダライラマ14世の即位式に出席したことがチベットに対して中国の主権が存在する証左としてあげられることを除くと、その行政手腕はあまり積極的な評価がなされてこなかった。特に現在の中国では国民党の暗黒的民族抑圧政策の実行者の一人という評価であり、イリ叛乱＝三区革命勢力との協調を図った張治中と対比される場合が多い。日記の解読はこれまであまり語られてこなかった吳忠信の人間像をより明確にし、その思想や信条の理解に大きく寄与することが期待された。

3. 研究の方法

本研究では吳忠信の蒙藏委員会委員長着任から新疆省主席辞任に至る1936年から1947年までの時期を中心に日記の解読を進め、この時期における吳忠信の民族政策の展開と民族問題に対する認識・構想の変遷について分析を行った。

吳忠信の日記は台湾の國史館と中國國民黨黨史委員會黨史館で原本のコピーが公開されている。どちらの施設においても日記は電子複写やカメラ撮影は認められず、収集作業は筆写に限定された。そのため研究代表者の上野は台湾への現地調査に赴き、閲覧環境が比較的良好な國史館を主に利用し、日記の閲覧と边疆民族政策に関連する記述の収集を行った。三年間の研究期間に吳忠信が边疆政策に関与した時期の日記記述の閲覧・収集を完了計画であったが、研究期間の後半においてはCOVID-19の国際的な感染拡大とそれに伴う日本・台湾相互の渡航制限実施、さらにはその長期化により台湾での史料収集が極めて困難な状況となった。しかしながら2020年夏以降、台湾の出版社である民国歴史文化学社が民国日記シリーズの1つとして吳忠信日記の刊行を開始し、2021年10月に全巻の刊行を完了した。上野は当該書籍を刊行に合わせて逐次入手して内容を確認したところ、日記の記述を活字に起こしたもので、電算入力という事情もあり原本記述の繁体字・簡体字ならびに略字・異体字等の書体が統一化され、また箇条書き表記の書式(表題の括弧書きや下線付記、番号記号の形式[アラビア数字、漢数字、甲乙丙および縦括弧・横括弧・丸囲み])も縦書きから横書きへの変更に合わせて横括弧に統一化されていることが確認できた。ただし記載内容についてはそれまでに筆記収集した内容と比較対照したが、書式面の相違を除いて内容の同一性を確認することができた。こうした事情を鑑みて、吳忠信日記の活字版を利用して未収集分を補完することで、本研究期間内に日記の解読作業を完了することとした。本研究期間内には実現しなかったが、日台間の渡航制限が解除され、現地での文献調査が可能になった暁には活字版と原本の記述内容の相違について改めて確認することになる。

本研究の調査では吳忠信が边疆各省の情勢研究に着手した1936年5月12日の記述から絶筆となる1959年10月27日のチベットとインドの国境地域紛争に関する記述まで、1921件の日記記述を収集した。筆写収集した日記記述についてはワープロで文字起こしを行い、さらにExcelデータとして時系列順に入力することで、年表式にデータの管理を行った。これにより日記記述

のキーワード検索及び検索語による並べ替えを行い、日記記述に対する検証作業の効率化を図った。このデータ収集手法はこれまでの調査研究においても実施しており、『蒋介石日記』の边疆民族問題関連記述および吳忠信日記の派生的著作である『入藏日記』と『主新日記』についても同一フォーマットでの収集史料のデータ管理を行っており、これらを利用して日記記述の比較検証を行った。また國史館を訪問して収集した蒋介石文書および国民政府文書の边疆民族問題関連の史料および中国大陸ならびに台湾で刊行された関連書籍の史料情報と日記の記述内容との照合や関連性の分析を行った。

4. 研究成果

吳忠信日記の資料性について

國史館では吳忠信日記を本文箇所のコピーを製本した形で閲覧に提供されていたため、原本の冊子形態や寸法を確認できていないが、コピーから確認できる情報として、一般的な手帳なしノートを使用し、横書き用の罫線が入った帳面を90度回転して見開きを上下二段の縦書きとして利用している。『蒋介石日記』が日記帳を使用しており、一日が1頁十数行の分量しかないために、記述欄が不足すると行間や欄外に細かな文字で追記し、そのことが日記記述の判読に困難をもたらしているのとは対照的に、吳忠信の日記記述は必要に応じて一日分の記載が数ページにわたるなど紙面に柔軟性があり、またおそらくは万年筆により筆記されたことから、毛筆を使用した蒋介石の日記と比べても格段に可読性が高い。このことは閲覧収集を円滑に進める上での好条件であった。

吳忠信の日記記述は1936年の蒙藏委員会委員長就任後から記述の分量が徐々に増大している。これは蒙藏委員会という政務機関の特質として边疆地域から南京及び重慶にやってくる非漢民族の有力者や边疆省の閣僚や軍人との接触が多いことが要因であり、吳忠信は彼らとの交流について比較的克明に記録している。また蒋介石ら政府要人との会談及び会議での発言などについては記録係を置いて記録させた上で日記に発言を細かく記載している。そのために『蒋介石日記』では边疆民族政策に関して数文字程度の簡潔な記述にとどまっている事項についてもその詳細を知ることが可能となっている。吳忠信自身も日記を備忘録として活用することを念頭に日記を執筆していたようであり、その点からも日記の資料性は非常に高いと評価できる。ただし1937年と1938年の二年分の日記については、吳忠信がラサヘ向かう途上で香港滞在中の家族に預けたものの、日本軍の香港攻略のさなかに焼失してしまい、残念ながら現存していない。また吳忠信がラサからの帰還後に報告書として提出した『入藏日記』は、日記の記載内容との異同がほとんどなく、日記を底本として作成されたことが確認できた。他方で吳忠信が新疆省長に在職していた時期を記した『主新日記』は着任後の業務内容だけでなく会談や講演の発言録、電報文のやりとりや重要文書の転載、調査記録の収録など、日記の規模を超えた政務日誌としての内容と分量を有している。他方で当該時期の日記の記述は比較的簡潔に内容がまとめられているだけでなく、発言録や電文などの内容については原文が『主新日記』に収録されている旨の注記が付されている。また日記の筆致も異なる上に日ごとの違いも見られないことから、『主新日記』の執筆が先行し、日記本体の記述は後日その要約としてまとめて書かれた可能性が高い。また吳忠信の日記と『主新日記』にはそれぞれ若干の記述の欠落が存在しており、両者を読み比べることで相互に補完することが可能となっている。こうしたことから吳忠信日記の資料性および有用性については当初の期待以上のものであることが確認できた。

また吳忠信は边疆行政に携わった経緯から、チベットのラサ訪問をはじめとして西北考察団への随行、新疆省への赴任とその後幾度かの重慶との往来など、遠方への長距離移動を体験しており、その間も克明に日記を付けている。その記述からは、当時の移動手段の制約、とりわけ航路線の未成熟が見て取ることができる。悪天候による出発の延期や旅程の変更、燃料補給の困難、荒天中の飛行機内の混乱、そして伝聞の形で描かれる墜落事故の悲惨な状況など、边疆各地への移動が今日では想像できないくらい過酷であったこと、また戦時下にあつて日本軍との遭遇や襲撃を回避すべく腐心していたことが読み取れる。その一方でラサ訪問時に目にした景勝や青海省の省都西寧に着陸する直前に操縦士が気を利かせて青海湖の上で旋回する逸話など、边疆の壮大な自然環境や歴史遺産を描写し旅の楽しさに触れる一幕もあり、旅行日記としてみた場合の面白さもある。それ以外にも西安事変が発生した時の南京政府内の動揺や、重慶に対して日本軍が連日行った空爆の被害状況など、中国現代史研究にとって参照すべき情報が記述されており、吳忠信日記の持つ多様な価値を示している。

吳忠信の边疆民族政策への関与と挫折

日記の記述を検証すると、吳忠信の边疆民族政策への取り組みが幾多の挫折に見舞われたことをうかがい知ることができる。吳忠信は蒙藏委員会委員長として中央政府閣僚の一員となったが、蒙藏委員会が边疆政策を担う上で大きな制約を受けていることを実感していた。蒙藏委員会はそもそも省制未施行のモンゴル(外蒙古)とチベットに関する事務を所管する政府機関でありながら、この両地域が独立状態にあるために実質的な業務対象が边疆各省の非漢民族に関す

る業務となり、中央各政府機関や辺疆各省政府との協議・調整なくして業務遂行が難しい状態にあった。呉忠信はラサ訪問の直前に『辺政計劃草案』を上呈し、辺疆政策を統括する「辺政部」の創設を提言したが、それは蒙藏委員会の抱える構造的問題を解消する一案であると同時に、ラサ訪問の準備段階における政府各部門との折衝において辺疆民族問題への無理解や無関心に起因する困難に悩まされた呉忠信がより強力な権限の必要性を認識していたことが日記の記述から読み取ることができる。ラサ訪問の成功と辺政改革の提言をもって蒙藏委員長職の辞去を考えていた呉忠信は蒋介石の強い慰留を受けて職務を継続するものの、チベット政府の政変と独立姿勢の鮮明化を受けて自身の能力の限界を理由に改めて辞意を表明し蔣から慰留されることとなる。辺疆民族問題が外交・軍事と不可分の状況にあり、外交努力による外国勢力の影響排除と軍事的優位の確立無しに辺疆政策の推進が困難であると認識した呉忠信は、辺政改革の議論を後退させ、「建設甘肅、穩定寧青、鞏固西康、控制西藏、調整新疆、溝通外蒙」の六項目を原則に掲げ、西北視察団への参加や軍事委員会へのオブザーバー参加などを通じて軍事部門および辺疆各省の政軍領袖との連携を強化した。1944年10月に蒋介石の要請を受けて新疆省主席を兼任し、蒙藏委員会の精鋭を率いて省都迪化に入り辺疆省の政務を直接担うことになった呉忠信は、盛世才時代に収監された政治犯の釈放を通じて民心の掌握を図ったものの、アルタイ地区の叛乱鎮圧に手を焼く間にイリでも叛乱が勃発し、叛乱勢力拡大への対応に追われる中で財政危機にも直面し、自身の辺疆政策実践が再度挫折を被ることになった。呉忠信は蒙藏委員長職の辞去による兼務解消を余儀なくされ、叛乱勢力の背後にソ連の存在を感じつつも、自身に外交交渉の権限がない故に、駐迪化ソ連領事を訪問した際に紛争調整の要望を伝えるのが限界であり、政府外交部門の対ソ交渉に問題の解決を委託せねばならなかった。1945年5月の国民党第六回全国大会に参加すべく重慶に赴いた呉忠信は、中央では戦後に向けた議論が進行しており、辺疆政策についても自身の与り知らぬうちに辺政部の設立が再び俎上に載っていることを知り、蒋介石に新疆省長職の辞去を請願し、またも慰留された。新疆に戻った呉忠信は新疆省を複数の省に分割して軍事・財政問題の解決を図ることを提言したものの、中央の反応は薄く、張治中によるイリ叛乱勢力との交渉および協定の締結により張治中の中国西北における主導性が高まったことで、呉忠信は新疆省政および辺疆政策の双方でレームダック化し、張治中の新疆省長兼任が決まると張の着任を待たず国民党二中全会への出席を理由に1946年3月に重慶へと戻った。呉忠信にとって中央政界を離れ自身の政策提言が受け入れられなかった現実には辺疆政治への意欲を喪失するものであり、蒋介石から蒙藏委員長への再登用を打診されるとこれを固辞し、その後は要請に応じて辺疆問題の検討作業にオブザーバーとして関与するにとどまった。

呉忠信の辺疆政策への取り組みは外交、軍事面での障害要因に左右され、幾つかの成果もその後の情勢変化で、呉忠信の民族政策、とりわけ新疆省での政治実践は中国近現代史研究者から大漢民族主義的傾向を指摘される。日記の記述からは呉が非漢民族に対して特に差別的な感情を持っていたと判断されるような記述は見受けられない。ただし呉忠信は新疆省長着任時に蒙藏委員長を兼任していたこともあり、中央政府からの派遣であることと三民主義に基づく政治を強調している。また呉忠信は新疆赴任時には高齢で健康上の不安もあり、省都迪化をほとんど離れず、新疆各地の官僚や軍官との交信、諜報網を通じての情報、そして迪化に来訪する非漢民族の政治・宗教領袖との会談を通じて各地の情報を把握し、省政府の政策を決定した上で各地に指示を出しており、こうした宮廷政治的な手法は呉忠信自身が意図していたかどうかは別にして権威主義的な統治と評価されるところであろう。また呉忠信は省長就任初期において新疆諸民族の政治・宗教領袖と会談する際にしばしば漢籍記述などを根拠に彼らが中華民族の一部であるという見解を披露している。こうした発想は蒋介石が著した『中国の命運』における中華民族宗族論を踏襲したものであり、中央の期待を担って新疆に赴いた立場の呉忠信としてはこうした立場を当然広めてゆくものと認識していたようであり、日記は会談相手から概ね肯定的な反応を示したことを記している。ただし非漢民族の立場からすれば寛容な政治と宗教の自由が保証されることが重要であり、呉忠信のそうした民族論に心から賛同していたかは不明であり、日記の記載に際して取舍選択があった可能性も排除できない。イリの叛乱勢力が東トルキスタン民族革命委員会名義で散布したリーフレットでは新疆諸民族と漢族との同源説を批判し、三民主義の受容を恥辱と評しており、呉忠信はこうした見解に断固反対するものの、イリ勢力が軍事的攻勢を強めるだけでなく、新疆南部においても影響力を拡大する状況に守勢に立たされることになった。対日戦争が最終局面にさしかかり中央からの軍事的・財政的支援が期待できない不利な状況に合ったことを勘案しても、呉忠信の辺疆統治には非漢民族から十分な支持を得られない限界性があったことは否めない。

呉忠信をめぐる人脈

日記の持つ個人文書としての性格は、呉忠信をめぐる人間関係を浮き彫りにし、それが彼の政治姿勢にどのような影響を与えていたのかを理解する一助となっている。呉は古参の国民党幹部であり、また南京国民政府成立後は軍人から政治家へと転身して経歴を重ねてきた。その中で

同郷の安徽省出身者や親交を持った人物との交流を活発に行っている状況を日記に記している。歴任したポストで得た優秀な部下を転任に際しても引き続いて任用し、腹心を主要部門に配置することで業務遂行の円滑化を図っていた。こうした恩顧主義的傾向は北伐完成後も隠然たる影響力を持つ地方軍閥との微妙な均衡関係で成り立つ民国期の政治において必ずしも例外的なものではないが、呉の日記はその実情を詳細に物語るものである。その点で特筆されるのが呉忠信と蒋介石の関係であり、日記では呉がさまざまな機会に蒋と面会し意見を求められていたことが記されており、特に蒙藏委員会委員長に就任してからは边疆民族問題についての意見交換を行っている。蒋介石との面談について呉忠信は日記に詳細な記録を残しており、呉忠信が蒋介石との非公式な接触を重視し、蒋介石の信頼を勝ち得てきたことを自負していたことを示している。呉忠信の蒙藏委員長職辞任の意思表明と蒋介石の慰留、蒋介石からの新疆省長職就任の打診と呉忠信の受諾もこうしたやりとりの中で行われており、両者の発言が生々しく記録されている。またラサ訪問時のレティン活仏との邂逅、青海省の統治を巡る馬氏軍閥間の紛争調停を介しての馬步芳との親交、西北考察団随行時から始まる盛世才との交流など、边疆民族地域の人物とも良好な関係を構築しようとしていたことがうかがわれる。盛世才はソ連の支援の下で新疆省を半独立状態に置いて「新疆王」と称され、その後中央政府に帰順すると大規模肅正を行ったことなどから厳しい評価を下される人物であるが、呉忠信は幾度も盛世才を訪問して新疆の政治について意見を交換し、また盛世才の新疆統治に対する批判に対しては彼を擁護するなど興味深い対応を見せている。他方で呉忠信の恩顧主義的姿勢は新疆赴任時の蒙藏委員会委員長代理の指名に際して副委員長の昇格ではなく同郷の羅良艦を承知したことで争いが生じており、また蒙藏委員会の精鋭を率いて新疆に着任した際に前任の盛世才時代からの官僚との業務引き継ぎに支障が起き、その後の新疆省財政の問題の遠因になるなどの弊害も起こしている。また国民党員でありながら汎トルコ主義的立場から新疆での高度自治導入を主張するイサ・アルプテキンやムハンマド・イミンといったウイグル人士に対しては不信を隠すことなく、重慶に滞在する彼らの新疆帰還に対しては幾度も拒否している。それだけに張治中がイリ叛乱勢力との協調姿勢を見せ、新疆入りに際してイサらを随行させたことに複雑な心境を抱き、また張治中の政策方針を容認する蒋介石に対しても自身の边疆民族政策への信頼が失われたと認識したことが中央政界復帰後の蒙藏委員長再任の固辞につながっている。日記はこうした人間関係をめぐる呉忠信の心情を書きとどめており、彼の行動原理や要因を知る上で有用な手がかりを与えてくれる。

研究成果の意義について

呉忠信日記の解説を通じて、彼が日記に書き記した様々な情報が抗日戦争期の中国における边疆民族問題を通時的に俯瞰する上で重要な資料的価値を有することが確認できた。呉忠信が直面した、外交問題や軍事の問題が重くのしかかる状況において内政として边疆民族政策を着実に実行することが極めて困難であるという当時の中国边疆の実情は、今日の中国共産党(中共)政権が民族問題の面において外国勢力の介入を拒絶し、軍事・警察力を導入して抵抗勢力の伸張を押さえ込む断固たる姿勢は、宗教に対する寛容性の違いはあるにしても、かつて呉忠信が果たし得なかった边疆の安定を実現した姿である。その意味では民国期の边疆問題に対する中央政府の危機意識が今日まで継続されているのであり、中共の民族政策が持つ歴史的背景を理解することになる。こうした観点からは中国の民族問題が中華民国期から人民共和国期を通じて存在する問題群として捉え、民族政策の展開を両時期にまたがる比較的長期の歴史プロセスとしてみるものの可能性を示しており、そうした点も本研究の成果が持つ意義であると言える。COVID-19の影響で史料収集が一時停滞したこともあり、研究期間内に成果の公表を果たすことはできなかったが、今後早急に公開の機会を得る予定である。また繊細で日記が失われた1937年と38年の状況、そして呉忠信が中央との連携を失っていた1945年の状況については、さらなる史料の収集と分析によって補完することが必要であり、今後解決すべき課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------